

行政や地域で働く 保健師の“バイブル”

評者◎大井美紀

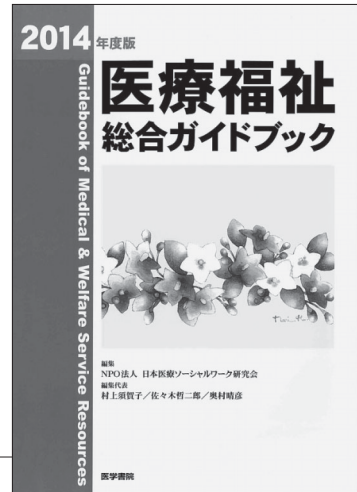
高知大学教育研究部医療学系看護学部門

医療福祉総合ガイドブック 2014 年度版

NPO 法人日本医療ソーシャルワーク研究会(編集)

村上須賀子/佐々木哲二郎/奥村晴彦(編集代表)

本体 3300 円 + 税 / 医学書院 (Tel : 03-3817-5657)



長年の『医療福祉総合ガイドブック』“ユーザー”の1人として、本書を紹介します。本書は、『社会資源』がソーシャルワーカーによって活用されるものだけではなく、利用者のものでなければならない」と考える、医療機関等に勤めるソーシャルワーカーらの熱意から誕生し、発刊から14年の歴史をもつ、きわめて信頼のおけるガイドブックです。

私が本書と出会ったのは、2001年(当時の書名は『介護保険時代の医療福祉総合ガイドブック』)です。当時、私は看護系大学の地域看護の教員として保健師教育に携わっており、活動事例を通して保健師の役割を学生に伝えていました。しかし、社会福祉基礎構造改革と介護保険制度のスタートにより、毎年、医療・福祉・介護のいずれかの制度が変わり、既存の経験・知識だけでは追いつかず頭を悩ませておりました。そんなとき、保健所で障害保健を担当していた友人から、本書を紹介してもらいました。その後、職場は社会福祉施設、病院、教育機関へと変わりましたが、私にとって本書が必携の書であることに変わりはありません。

本書を主に行政や地域で働く保健師に薦めるのは、保健師は支援対象者を疾患や障害別で区切るのではなく、「地域で生活する人」として捉え、当事者や家族が主役となる支援を、地域でつくり、つなぎ、つくりかえていく必要があります。そのためには、個々のニーズや状況に適した社会資源の情報をタイミングよく適応させる技が重要だからです。また、

昨年出された厚生労働省健康局通知「地域における保健師の保健活動について」(平成25年4月19日健発第419001号)では、「保健師は、健康問題を有する住民が、その地域で生活を継続できるよう、保健、医療、福祉、介護等の各種サービスの総合的な調整を行い(中略)地域のケアシステムの構築に努めること」が明示されました。しかし、年々変わる制度や、仕組みの異なる各種保険や福祉サービスの関連を理解し、情報を収集し、状況にあてはめ使い込むのは、専門職であってもかなりの労力を要します。そんなとき、本書はバイブルとなります。

本書の構成上の工夫として、①全体像の俯瞰と、具体的な細部の情報が得られる(豊富な図表、具体事例、裏表紙の「ライフステージからみた社会保障」など)、②社会資源の利用者が権利意識にもとづいて主体的に活用できる(用語の使い方や「資料編」など)、③通常社会保障とは異なる未曾有の自然災害を受けた生活への保障に関する章を設けている、④制度上の問題提起やソーシャルワークへの提言が「コラム」や「社会資源活用とソーシャルワーク」という章で紹介されていることなどがあげられます。

本書は、「学部生や社会人大学院生にもわかりやすい」「実践が見える」と好評です。とくに、「コラム」は、学生たちが課題研究を深めるにあたって多に活用されています。最後に、本書を購入された方には、次年度版が出たら必ず買い換えることをお勧めいたします。